

◎地域とスポーツ

①プロスポーツと地域を結ぶーJリーグ百年構想

■川淵三郎

1 地域社会に根差したスポーツクラブをつくらう

① Jリーグは単なるプロリーグではない。これまで、日本のスポーツは、学校教育の授業や部活動、企業の福利厚生活動に依存した形で発展を続けてきた。そこでは「誰もが楽しむ」という、スポーツ本来の姿を実現することは不可能であった。選手はそれぞれの組織の中で強化されてきたが、生涯を通じて、継続的にスポーツに親しむための環境は整備されてこなかったのである。

なぜJリーグを設立したのか。日本のプロ野球と同じ仕組みをサッカーで実現しようとしたわけではない。Jリーグの目的は、「地域社会に根差したスポーツクラブをつくる」ということであった。そのためには経済的基

盤もしっかりしたものでなければならぬ。その経済的基盤をつくるために、プロのチームをつくって、多くのファンを集め、多くの収入を得て、それを地域社会に還元する。還元の内容も、サッカーだけではなく、いろんなスポーツを楽しめる施設をつくっていく、指導者も育成して、地域社会にスポーツを楽しめるような指導者を提供していく、そんなイメージを目標においたのが、Jリーグだ。

② 緑の芝生のグラウンドを全国各地に

この理念につながる一番の動機は、自分が小さい時にどこにでもあった「近くの原っぱ、広っぱ」を再現したいという思いであった。そこで、我々は自由に、いろんな遊びをしてきたわけだが、今の子供たちにはそういう遊び場がない。さらに言うと、芝生のグラウン

ドだ。外国に行くと、また来たいと市民が思うのは、芝生のグラウンドがあるからだなど実感する。土のほこりっぽいグラウンドがたくさんあっても、常時利用する市民は、増加しないものである。

ヨーロッパに行けば、近くの公園で緑豊かな芝生のグラウンドが山ほどあって、だれもが気楽に、気軽にスポーツを楽しめるようになっていく。ヨーロッパの人は、そういうものがあるのが当然だと思っている。スポーツは、土のグラウンドではなく、芝生のグラウンドでやるものだ。ところが、日本に帰ってみると、芝生の上でスポーツをやるなんてぜいたくというより、スポーツは土の上でやるものだと思っている。だから、日本に芝生のグラウンドを多く作りたいと思った。しかも、だれもが気楽にそこに行つて、スポー

①プロスポーツと地域を結ぶーJリーグ百年構想
②横浜市におけるスポーツの現状と課題

1 地域社会に根差したスポーツクラブをつくらう
2 Jリーグの百年構想
3 地域での取り組みと自治体・企業に望むこと
4 ワールドカップの開催意義
5 おわりに

を楽しめるような芝生のグラウンド。それが発想の原点だった。残念ながら、そうした点でいえば、日本のスポーツ施設に対する考え方は、ヨーロッパあるいはアメリカのようなスポーツ先進国と比べて、三流国である。しかも、そのことについてだれもが変えようと思わない。それなら、サンプリ的なスポーツ施設と環境を、Jリーグのクラブがつくろう。なるほど、これならスポーツが楽しめるなどというモデルを提示して、意識そのものを変えたいというのがJリーグなのだ。

いい前例ができて、体験を通じて初めて、行政サイドや多くの市民の皆さんが、こういうものを自分たちのまちにも欲しいなどと思うようになってくれるのだと私は考えたのである。

③ エリート養成よりスポーツを楽しめる層を一方、サッカーという一競技から見た場合、Jリーグは、世界のレベルに達するような日本代表チームをつくりたい、選手を育てていきたいという目的も持っている。今の現状でもエリートの選手はある程度、優れた指導者とかプロ化ということを通じて、そういう方向で育てていく。しかし、エリートの選手はスポーツ愛好家の数百分の一、何千分の一かもしれない。じゃあ、あとの数千人の人たちはどこで、どうスポーツを楽しめばいいのか。そういうことについて、日本の社会とというのは顧みてないというか、気にしてこなかった。

だから、エリートの選手をどうするかというより、スポーツを楽しみたい人たちのため

にもっと場を提供すべきじゃないか、国、行政は意識的にそういうものをつくっていくべきじゃないか、そして、それなりのレベルに応じた指導者をきちんと育てていくべきだということ、今、主張することが大事であると思う。

現在の日本では、情熱と、時間の余裕のある人がいろいろなスポーツを教えているが、実際の知識や経験を余り持たない人が多い。彼らが、様々な指導方法を学びたいと思っても、機会がないというのが理由であろう。指導者を育てる指導者が日本は全く足りない。子供たちにスポーツを楽しんでやらせることよりも、むしろスポーツは苦痛であるという方向にどんどん進んでいってしまっている。だから、スポーツ嫌いが生まれる。それでは人間としていいわけがない。頭でっかちで、偏差値だけ高ければ、日本の世の中、それでもいいというわけではないだろう。

人間として生きていくために、体づくりというものは必要不可欠である。それは優秀な選手をつくるということとは別に、人間として立派な体づくりが、遊びのうちに構築されるのが一番いい。楽しみながらスポーツすること、人を思いやる気持ちやリーダーシップ、協調性や犠牲的精神など、人間として大事なものを培える。

そこへ行く、運動能力が低くたって、楽しめるような「だれもが行きたいと思う場所」を整備した方が、日本という国にとって価値のある結果を生むことになる。そのためには、土ではなく緑豊かな芝生のグラウンドをつくるのが最優先だ。これが、緑の芝生にとて

川淵 三郎

(社)日本プロサッカーリーグ(Jリーグ)チェアマン。

日本を代表するサッカー選手として、アジア大会・東京オリンピック等に出場。古河電工監督、ロサンジェルスオリンピック強化部長を経て、平成3年、日本プロサッカーリーグ設立とともに、現職に就任。また、平成6年には日本サッカー協会副会長、平成8年にはワールドカップ開催準備委員会実行副委員長に就任。

日本サッカー界の第一人者として活躍中であり、サッカーを通じたスポーツ振興に奔走する毎日である。



もこだわっている理由である。

④「豊かさ」とゆとり時代の地域社会の核を生み出す

豊かさゆとり時代の時代になって、地域社会でどう生きるか、日本全国で問われ始めている。しかし、多くの人たちには、今までは会社の延長線上、学校の延長線上といったつき合ひしかなかった。急に地域社会でどう生きるかと言われても、生きる場がないじゃないか、コミュニティの核がないじゃないかということになる。それならば、そういうものを整備すべきではないか。

では、具体的な整備を考えたとき、そういうスポーツクラブは、どの位の数が必要だろうか。気軽にに行けるという意味では、一つの目安として、歩いていける範囲に一つ、つまり、小学校の数ぐらい欲しい。小学校の数ぐらいということになると二万五千カ所ぐらい要るわけだが、そんなことをいうと「また夢みたいなことを」と頭から不可能と思われるしまう。そこで、県に最低二百カ所という目標を立てた。五十県あつて、一万カ所。これくらいは、最低できるべきだと私は思っている。もちろん、土地が狭い日本では、学校施設の有効活用が必要である。そのことから日本中の学校が芝生のグラウンドを持つことが私の夢である。

2 Jリーグの百年構想

① Jリーグの現状

百年構想は、地域社会の人たちがそこに気

楽に行くことができ、いろんなスポーツを楽しみ、そこにクラブハウスがあつて、たとえスポーツの嫌いな人でも、そこでお茶を飲んだり、カード遊びをしたりして、近くのコミュニティの人たちと集い合つて楽しく時間を過ごす。そんな、地域社会の核となるべきスポーツクラブづくりを、あせらず、時間をかけて、目指していこうというものだ。

Jリーグの理想が達成できるまでには百年ぐらいかかるだろうというのが「百年」の由来である。しかし、少しでも早く目標を達成するために、自治体や国が、積極的にバックアップしてほしい。私たちの理念に、国そのものが「よし、そうだ」と理解を示し、資金負担をして、積極的に支援してくれることになつて初めて、Jリーグのいう理念は達成される。もちろん、国が簡単に納得して、お金を出してくれるわけではないことは承知している。だから、いいサンプルづくりをして、こういうものを全国につくつてほしいですよと身をもって示す、という流れで現在の活動を展開している。

こうした設立理念に立ち、五年を経過したJリーグだが、現状を見渡してみると、トップチームの練習場をようやく持たつたというチームから、鹿嶋のように一初めからクラブハウスがあつて、地域の人たちがそのクラブハウスの二階が上がつて、コーヒーを飲みながら練習を見学できる、芝生のグラウンドが三面、人工芝のグラウンドもある一素晴らしいサンブルになつていくものまで、様々である。また、地方自治体が全面的にバックアップしてくれているクラブもある。各クラブとも徐々

に施設を増やしつづつあるが、例えばヨーロッパの超一流クラブのように一芝生のグラウンドが十面、体育館が三つぐらいあつて、プールもレストランもある一というようなクラブが日本にできるまでには、少なくとも後二十〜三十年はかかるだろう。

クラブとして経済的にしつかり自立していかなければならないという点で現状をみると、選手の年俸等、経費面での支出が増大し、それと比較して入場料収入・スポンサー収入が減少しているため、収入と支出のバランスが取れていないクラブが多い。今後五年、十年と経過していくうちに、いろんな試行錯誤を経て、初めてクラブの経営として求められるべき姿に近づいていくのではないか。百年構想からいうと今は百分の五ぐらいの達成率という状況なのである。

もちろん、Jリーグの目標を実現していくための課題は山積している。観客動員数の減少、テレビ視聴率の低下等、人気面において当初の勢いはない。これをどう回復していくか。そのために、入場料の見直し、競技場の快適さ、アクセスの改善、スター選手の育成等、やるべき事は山ほどある。しかし、観客にとつて魅力ある試合を見せられるかどうか、Jリーグに求められている全ても言える。また、フランスワールドカップ予選に負けたらJリーグはだめになるというような言われ方もされる。二〇〇二年のためにも予選突破は必要条件だが、例え最悪の場合でも、一喜一憂せずJリーグの理念のもとに着実に一歩一歩歩んでいくことが大事だと思つている。サッカー以外の競技団体では企業の名前

がチーム名の冠になっているという現状もある。その中で、Jリーグがとにかくサンプルを示すんだということになると、まだインパクトが足りないかもしれない。理念の実現のためには、工夫を凝らした戦略が必要であることは間違いないが、ひとつひとつの課題をいねいに解決していくことが、結果的には早道になる。百年かけても理想の形を作り上げていこうというJリーグの理念は、課題解決の場面でも、失敗を恐れず実践していくべきだと考えている。

そもそも、百年構想はJリーグの設立を検討している段階から存在していたのであり、新たに打ち出したものではない。一緒に相談しながらJリーグを作り上げてきた人や、新聞記者等々、周辺の人たちがほとんど関わっていく状況を受けて、改めてこの構想と理念を明言しないと、Jリーグは何を考えているかわからないという状況になりかかっていた。そこで、昨年に、あえて百年構想と銘打って、全国的にPRしたわけである。去年のねらいは、1百年構想、何だかわからないけれど、理念を持ってやっているんだな。長い目標を持ってやっているんだなということをおわかってもらえばいいということにあった。

② 1百年構想の中の九七年度活動方針

Jリーグの理念を積極的にPRし、行政や企業の理解と協力を要請すると同時に、地道な活動と努力を積み重ねていかなければならない。なんといつても、五十年後、百年後の、わが国のスポーツ環境を整備することが目標なのだから。そのためには、「一九九七年度

のJリーグの活動方針」に掲げたように、チーム数をどんどん増やしていく。そして、一九九九年には一・二部制を採用する。北海道から九州までサンプルとなる場所をできるだけ多くつくっていかないとJリーグの理念は、理解してもらえない。できたばかりのJリーグが、お客さんがいっぱい集まるといっただけのことを考えれば、初めの十チームでそのままやっていった方が、チームの名前も覚えやすいし、親しみももっと持てるだろう。しかし、Jリーグというのは地域に根差したスポーツクラブづくりが目的だから、地域の

人たちがサポートしてくれる、その地域ならではのスポーツクラブをつくらなと意味がない。両リーグを通じて十二球団と限定している日本プロ野球連盟の運営方針と、根本的に違うのはこうした点なのだ。

チームが増えることによって、全国的に見れば親しみが持てなくなる要素は確かに多いが、地域に密着したチームができれば、少なくとも、その地域にはJリーグがみえてくる。日本全国のファンの数が減っても、地域社会のそのクラブを応援する数が固定的にふえていくことを優先して考えているので、傍目

1997年度のJリーグの活動方針

「私たちは、リーグの社会的役割をきちんと認識し、そのための業務を遂行することにより、だれもが気軽にスポーツを楽しめる機会や場を、より多くの地域の皆さんに提供したいと考えています」

- ①フェアで魅力的な試合を行うことで、地域の皆さんに夢と生活の楽しみを提供します。
- ②自治体・ファン・サポーターの皆さんの理解・協力を仰ぎながら、世界に誇れる、安全で快適なスタジアム環境を確立していきます。
- ③地域の人々がJクラブをより身近に感じていただくため、クラブ施設を開放したり、選手や指導者が地域の人々と交流を深める場や機会をつくっていきます。
- ④気軽に楽しめるフットサルを、地域ぐるみや家族で楽しめるようなシステムを構築しながら普及していきます。
- ⑤サッカーだけでなく、他の競技にも気軽に参加できるような機会も多くつくっていきます。
- ⑥身体に障害を持つ人たちもスポーツを楽しむことができるような場と機会を提供するとともに、障害を持つ人も一緒に楽しめるスポーツのシステムを作っていきます。

から観たときに、人気の低落というイメージにつながっている面も一方にはある。しかし、我々の理念からいうとそれは当然のことで、「より多くの地域の皆さんに快適なスポーツ環境を提供したいと考えています」という理念がある限り、人气が落ちるからチーム数を減らしてやった方がいい、という考え方にはつながらないのだ。

快適なスポーツ環境の整備に向けては、既存スポーツ施設の改善も地道に考えている。三ツ沢競技場を例として考えると、狭いスタジアムでありながら、観客が全部出終わるまで当初は三十分以上かかるとよく苦情を言われた。今では、市のご理解のもとに出入り口を増やすなどの改善のお陰で、スムーズに入退場できるようになった。しかし、問題点は分かっている、なかなか改善されない場合もある。施設そのものを改築しなければならぬ等、簡単に直せない部分があるからだ。そういう状況をわかっているながら、「すぐ改善します」と短期目標として掲げても絵に描いた餅になってしまう。

地道に中長期的な課題として考えているのは、そういう理由である。しかし、問題意識を持って、改善する方向で努力をするというスタンスは変わらない。

一九九七年度の活動方針は、百年構想の中の一部である。「今年はずいぶん、この活動方針の内容を各クラブで真剣に考えてほしい」ということを具体的に打ち出したものである。

3 地域での取り組みと自治体・企業に望むこと

① 各クラブの取り組み

こうした方針に沿って、活動を進めていくには、自治体、地域のスポーツやボランティア団体と連携を深めていかなければならない。そこで、今年は、地域ぐるみ家族ぐるみのフットサル普及・サッカー以外の競技に気軽に参加できる機会の提供、障害を持つ人たちがスポーツを楽しめる場と機会の提供という事業に、三千万円の予算を計上した。クラブが主体となって「うちはバレーの大会を開いて地元の人たちと交流します、五百万円ぐらいかかるんだけど」と申し出たら、一件につき最高百万円まで資金援助する。フットサルについても、身体障害者の人に対しても同様に対処する。十七クラブが一つずつ実行したとして、五千万ぐらいになる計算だが、予算が許せば、一億の支出をしたいぐらいの気持ちである。

例えば、昨年、鹿島アントラーズでは、バスケトボールの大会を実施した。準会員では、ブランメル仙台が野球教室に取り組んだ。ブランメルは県と市が積極的にバックアップしている理想的な事例である。クラブを可能な限り、県や市の行事に参加させることによってバックアップしやすい土壌をつくっている。資金的な面で援助するとき、ただ単にサッカーのクラブを応援しているということでは、県民や市民の賛同を得られない。そこで、親子献血サッカー教室というアイデアをだし、クラブを市民と結びつけていく工夫をしてい

る。サッカー教室にやってくる子供たちと、見学のお母さんたち。そのお母さんたちが献血してくれるわけだが、そういう人たちがブランメルのファンになっていく。その他にも、仙台スポーツ教室、ブランメル野球教室等を実施して、応援しやすいような体制をつくっていく。行政が、そういう形でクラブを支援し、クラブも場所や人材を惜しみなく提供することができ、それが県民や市民に役立っている。

② 自治体、企業に望むこと

Jリーグが行政に望むのは、まず、基本的にJリーグが利潤追求だけの法人ではないという事実を理解して頂きたいということである。その上で、地域社会に貢献しているという活動に対して、積極的に働きかけて頂きたい。行政サイドから目的達成のためには、Jリーグはこうすべきだとたくさん提案して頂きたい。

熱闘倶楽部を持つ横浜も、フリーゲルスやマリノスを、積極的に市の行事の中に組み込んで戴ければ有り難い。横浜をホームタウンとするクラブなら、行政の提案に協力しない方がおかしいという方向に市が遠慮しないで指導してほしい。クラブにとっても、プラスになるのだから、横浜ベイスターズも含めて、熱闘倶楽部を活用して頂きたい。サッカーと野球を一つにまとめているのは、熱闘倶楽部のみ、横浜市だけである。そこで、市民と三チームと行政がうまく連携していくことができれば、必ず他の地域にもいい影響を与えられるはずである。実力と発展可能な要素を持つ

横浜が全国をリードして、クラブが地域に貢献していく土壌づくりをしてほしいと、Jリーグは心から願っている。

それらの成果―活動方針に沿って各クラブが地域で展開している活動―がどんなものなのか、半年ごとぐらいにJリーグが世間に対して積極的にPRしていく。それは、各クラブへの刺激になるとともに、地域スポーツの振興に対する啓発にもなる。

私は今、十年後を目標としたビジョンをいくつか持っているが、そのひとつに、市のご協力によって横浜市立大学がテストケースで行っている「少年サッカー指導者養成のリカレント講座」がある。

この、大学とJリーグが共同で指導者の養成をする横浜市立大学方式を、全国九地域：北海道、九州：というサッカーの九地域で広げていきたい。横浜でいいモデルづくりをして、「こんな展開もある。みなさんも是非実施してください」と、十年後を目指し、各都市にPRしていくことができる。横浜市がJリーグに賛同して、新しい形のスポーツ指導者養成を実施してくれていることを、我々としては高く評価し、感謝している。前段でも述べたように自治体に望むのは、そうしたサポートだ。また、自治体もJリーグも、「よりみんなに喜ばれるもの」を目指して、とりあえず、トライする。新しいことをやって、試行錯誤しながら、作り上げていこう、というスタンスでどんどん活動していかなければと思っている。

また、スポーツ環境の整備には、企業の支援も重要である。余力があったら、パトロン

として地域住民のための施設を、どんどんつくってやろうという意識の企業も出てきてほしい。企業の名前を出さないと、広告宣伝にならないから、お金を出している意味がないというのが今までの日本の社会の通例であったが、少なくともJリーグのクラブを裏からバックアップしてくれている企業は、パトロンというイメージで支援してくれている。Jリーグも、名前が出ないならやめたという企業には来てほしくない。それは非常に

はつきりしていて、胸のマークに名前が出る会社の方が得だという持論なら、胸のマークをつけるためだけに参画してくればいい。企業の社会貢献、社会還元という視点から、積極的に地域社会に還元していつてあげよう、貢献していつてあげようという企業マインドで支援してもらおうのでなければ、地域に根差したクラブというものは成り立っていかないのだ。

4―ワールドカップの開催意義

地域におけるスポーツ振興を考えると、忘れてならないのが、国際的なスポーツイベントの開催だ。二〇〇二年に日韓合同で開催されるワールドカップは、様々な意味で地域に貢献するものになるだろう。

前回アメリカで開催されたワールドカップの決勝戦は、二十億の人が観戦したと言われている。二〇〇二年では二十五億人以上の世界の人が、日本での決勝戦を一齐に注目することになるだろう。もし仮に横浜で決勝戦が行われるとしたら、世界における横浜の知

名度がどのぐらい上昇するだろう。また面白いシティーセールスの機会であることは間違いない。

また、ワールドカップの開催期間約一カ月間を考えたときにも、都市に与える影響の大きさが見えてくる。早いチームで開催一カ月前から現地入りする。横浜が滞在地であれば、開催期間を含めた二カ月間、その国には、横浜での自国チームの様子がニュースとして流される。つまり、「横浜」が世界に向けて毎日発信されるということだ。大都市としての顔、港町としての顔、ローカルの顔、あらゆる角度からの横浜が世界に知られるのだ。

さらに、最も大きな情報発信がある。「人」である。選手や世界中から集まる観客はもちろん、マスメディアの人たちも、様々な場面で横浜市民と接することとなるイベント、それがワールドカップだ。つまり、横浜の市民性が、世界に発信される絶好の機会なのだ。もちろん、横浜市民が世界の人々にどんな印象を与えるのかを、試される機会にもなるわけだが、国際都市を自負する横浜の市民である。スポーツを共通テーマとして、友好的な交流が図れるだろうことは、容易に想像できる。

一方、都市としての基盤整備の充実も、ワールドカップ効果としてあげられるだろう。世界中から集まる人々が、快適に過ごせる横浜を目指して整備が進めば、市民にとっても快適なまちになることは当然である。百分の満足ではないにせよ、整備が大きく進むことは間違いない。

スポーツ施設や交通アクセスは、ハード面

の資産として、ボランテニア参加者の増加や、国際交流の進展は、ソフト面の資産として、それぞれが横浜市民に向けた、ワールドカップの置きみやげとなる。都市にもたらす効果は無限に存在するのである。

5 おわりに

「Jリーグは、夢を持ち続けることにより実現し、夢を持ち続けることによって発展す

る」のだと、私は思っている。Jリーグのイメージは、三十年以上も前に、ドイツのサッカークラブを訪れた時から、持ち続けていたものだった。障害者も車椅子でスポーツに参加している素晴らしいスポーツ環境に触れて、地域に根差したスポーツクラブが日本にもできたらいいのにと切実に感じた。サッカーがマイナーなスポーツであった当時の日本ではそれは実現不可能だと思っていた。しかし、今こうしてJリーグは存在している。夢を実

現するためには、「夢を持ち続け、絶えず行動していくこと」であると、Jリーグ設立までの経験を通して、日本の青少年に伝えていきたい。私自身、今後も、夢を持ち続け、理念を具象化していきたい。そのためには、五十年後も、百年後もJリーグを「走りながら考える熱意の組織」として維持させていかなければならない。そして、必要なら「怒れるチエアマン」であり続けよう。そう、肝に銘じている。